

平成25年度卒業式 学長式辞

愛媛大学長 柳澤 康信

ただいま、1,845名の皆さんに学位記を授与いたしました。卒業される皆さんに心からお祝いを申し上げます。「おめでとう。」

本日の式典には、先ほど紹介させていただきましたように、愛媛県の各界を代表する方々、そして愛媛大学にゆかりの深い諸先輩に来賓としてご臨席を賜りました。お忙しい中、ご臨席いただいたことに厚くお礼を申し上げます。また、本式典にご出席のご家族、関係の皆様に対して、心よりお慶びを申し上げますとともに、日頃から本学に対するご理解・ご支援に対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

卒業される皆さんは、在学期間中にそれぞれいろんな困難や苦労があったことと思います。それを克服して今日の佳き日を迎えるに至った努力を讃えたいと思います。皆さんが自分の苦難を振り返ってみると、そこには必ず、家族、友人、先輩や後輩、指導教員などの温かい支援や助言があったはずです。それらの人たちへの感謝の思いを今一度自分の胸に刻み付けて、これからの人生の糧にさせていただきたいと思います。

皆さんの大部分は就職し、社会に巣立って行くわけですが、大学卒業は人生の大きな節目であり、未知なる新しい社会への船出でもあります。この節目にあたって、いま自分がなすべきことは何かを考え、目標をしっかりとって努力すること、このことをぜひ肝に銘じて下さい。また、314名の卒業生は大学院に進学し、勉学活動を続けることとなりますが、大学院に進学することも社会に巣立つのと同じように、大きな節目であります。大学院では学部での勉学と質的に違う深い研究能力と広い領域の知識の修得が求められます。社会に巣立つにせよ大学院に進学するにせよ、常に学ぶ姿勢を保ち続け、これまでに培った「知の力」をさらに向上させていただきたいと思います。

愛媛大学では一昨年の7月に、愛媛大学学生として期待される能力として「愛大学生コンピテンシー」を制定しました。この「愛大学生コンピテンシー」は今年度の新入生にはパンフレットを配って周知するようにしていますが、卒業生の皆さんにとって少し馴染みが薄いかもかもしれません。この「愛大学生コンピテンシー」には、「5つの能力」が掲げられていますが、そのうち、これから社会にはばたく皆さんにとって特に重要だと思われるのは、「多様な人とコミュニケーションする能力」と「組織や社会の一員として生きていく能力」の2つの能力です。これらは「社会的能力」と言い換えることができます。皆さんはすでにこれまでの大学生活の中で、例えば、所属する研究室の中で、あるいはサークル活動によってリーダーシップ、協調性、あるいは対話や討論する能力などを高めてきたと思いますが、その能力が十分に身に付いているかどうか本格的に問

われるのはこれからです。

実社会に出れば、皆さんは必ずどこかの集団や組織に所属します。集団や組織においては、構成員一人ひとりが責任と自覚をもって行動し、それぞれの役割を果たすことが大切です。しかしそれだけでは十分であるとは言えません。集団や組織では、チームで仕事することが多くなります。チームでの共同作業、すなわちチームワークです。ここでは、チームのメンバーがいろいろな意見やアイデアを出し合って、最終的にひとつの合意を形成していく機会が多くなります。チームワークにおいては、一人ひとりの能力に限界があっても、多様な知識や技術をもった人たちが相手のことを尊重しながら自由に考えを出し合い、徹底的に話し合うことによって、当初誰も気づかなかった新しいアイデアに到達することがあります。これがチームで仕事をすることの醍醐味です。目的を達成するために多様な人と意思疎通して一緒に協力し合う。このような協調的な姿勢が社会人には特に求められています。このことをぜひ認識していただきたいと思えます。

さて、今日（こんにち）、グローバル化の流れは加速しており、情報通信・交通手段などの飛躍的な技術革新を背景にして、政治・経済・社会のあらゆる分野で、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」が国境を越えて高速移動し、特に経済活動においては相互依存が増大し、世界がひとつになろうとしているという印象を与えています。しかしその一方で、人はあくまで国家という単位でまとまりをもって生活しているという厳然たる現実があります。現在世界には195の国がありますが、国家間ではいつも無数の利害の対立があり、またそれに伴ってさまざまな感情的な軋轢も生じています。

いま日本でも、近隣国との軋轢が急に目立つようになっています。その極端な事例がヘイトスピーチです。ヘイトスピーチとは、特定の人種や民族、宗教などをおとしめたり、あるいはそれらへの差別をあおったりする憎悪の表現のことです。「何々人はウジ虫ゴキブリだ!」「何々人は地球から出て行け!」などといった表現のことです。最近、マスコミで批判を受けたサッカースタジアムでの「Japanese only」の横断幕もその一例と言えるでしょう。実はネット上ではこのようなヘイトスピーチが飛びかっています。

ネット上ではなぜヘイトスピーチがまかり通っているのでしょうか。それは自分の名前が相手に知られないという匿名性が大いに関係していると思えます。現実社会においてヘイトスピーチが比較的稀なのは、人と人とのつながりがあるからです。そこでは、人間として共有できる体験があったり、共感できる感情があったりするため、憎悪の感情が生まれにくいのです。また、ネット上の「炎上」という現象も、匿名性に加えて、同じ価値観をもつ集団が他に対して非寛容的で攻撃的になりやすいというネットの特性を表していると考えられます。

しかし、これからますます世界全体がネット社会になっていくのは避けられないこと

です。ヘイトスピーチが蔓延するのを避けるための最良の方法は、平凡な言い方になりますが、人と人が実際に顔を合わせて交流することです。皆さんのほとんどの人は、在学中に外国からの留学生と交流したり、実際に海外で学んだり、生活したりする経験があったと思います。人が交流する場では自ずと共感が生まれ、相互理解が深まります。一人ひとりがそのような具体的な体験を積み重ねることによって、国家間の無用の軋轢を避けることができるのだと思います。

では、ユニバーサル化が加速する中で、今後、国家はどのようになっていくのでしょうか。国家という枠組みはいつまでも続くものなのでしょうか。

そもそも国家とは何なのでしょう。改めて国家とはなにかと問われても、何を問われているのか分からないほど、私たちは国家というものを当たり前のものと感じています。

歴史的に見れば、国家が成立する以前、人類は部族社会を形成していたのは間違いないところです。日本人の両親をもつアメリカの政治思想家フランシス・フクヤマは「政治の起源」という最近の著書の中で、長い時間をかけて部族社会に政治制度が生まれ、一定の区切られた領土において権威を集中させ、その権威が軍事力を独占することによって、今日、国家と呼ぶものの原型が成立したと説明しています。それが時を経て、社会の伝統的な掟が明文化されて法という正式な決まり事が出来上がり、その法制度が軍や官僚制度を指揮する統治者の権限よりも上位にある権限とみなされるようになった。これが「法の支配」と呼ばれるものです。そしてついには、統治者を法に従わせてその力を制限するだけでなく、市民を代表する議会などに対し、統治者に「説明責任」を負わせる民主主義的社会が出現したと彼は説明しています。

したがって、近代的な民主主義は次の3つの制度をもっていることになります。それは、①権限を統合し行使する国家、②法の支配、③説明責任を負う統治機構の3つです。フクヤマは、これら3つの要素がバランスのとれたかたちで統合されておればその近代的民主主義はうまく機能していることになるが、しかし3つがうまく統合されるのは容易ではないと考えています。

例えば、中国は秦王朝の時に世界で初めて国家建設に成功し、中央集権化されたすぐれた官僚統治機構を確立しました。しかし、②法の支配、③説明責任を負う統治機構についてはほとんど発達しませんでした。そして、その状況は現在の中国でもさほど変わっていないとフクヤマは見ています。中国はこの30年余りで奇跡的な経済発展を成し遂げましたが、このような統治の仕方はいったい長続きできるのでしょうか。これが彼の現在の関心事であるだけでなく、国際社会の大きな関心事でもあります。

一方、日本では憲法改正や軍備の在り方が話題になっています。憲法は②法の支配の根幹部分です。そして、軍備は①権限を統合し行使する国家の重要な構成要素です。戦後ほぼ70年が経過しました。国の根本的な政治制度の在り方を改めて問う時期に来て

いるのかもしれませんが。

卒業生の皆さんのような若い世代は、未来社会をつくる担い手です。グローバル化が急速に進展する中で、これからの国家の姿はどのようなようになるのでしょうか。また、国家間の関係はどのようなのでしょうか。皆さんが、社会にはばたいてからも、世界の状況を俯瞰的に観察して冷静に判断し、そして自分で確信を得たことについては果敢に行動に移すことを期待します。

おわりに、皆さんが将来それぞれの分野で活躍され、日本および国際社会の発展を牽引するリーダーとなることを祈念して、門出にあたってのはなむけの言葉といたします。